

 <p>一九八〇年発行 葉書サイズの チボリニュース 第一号</p>	 <p>2020年1月25日発行</p>	<p>NPO 法人ビラードの医療と自立を支える会 (英文名略称・HANDS)</p> <p>本部：〒227-0033 横浜市青葉区鴨志田町 516-11</p> <p>TEL & FAX: 045-500-9151</p> <p>E-mail: hands-mindanao@nifty.com</p> <p>http://hands-mindanao.a.la9.jp/</p> <p>郵便振替口座 00210-5-72693</p> <p>(加入者名) ビラードの医療と自立を支える会</p>
---	---	--

海外支援の活動 — ゴールに向けての自立支援と、ゴールのない現地に学ぶ活動 —

令和初の新年、オリンピックイヤーの始まり等々、特別感があるこの1月、ビラード通信も100号目となりました。また、この2020年1月は、1980年に藤原輝男氏が「チボリ里親の会/JOFPA」を設立し、日本人がミンダナオ島先住民族の教育普及に関わるようになって満40年という節目の時でもあります。うち直近の7年間は、JOFFPA解散を受けて、チボリ支援も私たちHANDSが担ってきました。

「SCMSI」を通じての「チボリの教育支援」という対象や分野限定の活動については、支援終了に向けたシナリオを描きやすく、本年はより具体的な方針を現地に、また皆様にお伝えできたらと思っています。

一方、当団体 HANDS は、1996年のビラードの村の医療支援から教育、環境保全、収入向上など事業分野が増えました。対象もチボリやマノボ、さらにモロ民族に広がりました。協働相手もCMB(現CMIP)から始まり、会報を紐解くと、1999年の18号でCOWHEDが、モロ民族医療チームPIHSは2002年の29号で、また、ブラクール支援やアグロフォレストリーのパートナー・PFPは30号で登場するなど順次増えて、COWHEDのように自立が近い対象がある一方で、新たなニーズとの出会いも尽きません。

現地事務所がないため、パートナーを通じての情報収集と年2-3回の現地モニターが適正な事業実施に欠かせません。この点で、3年近いミンダナオ全域の戒厳令は、モニターの機会が制約されて、早めの課題把握や対応に、支障ができました。

前号でも触れた政府のカレッジ奨学金 UniFAST の大幅拡充情報は、私たちの今後の教育支援変更にもかかわる大変貴重なものですが、あしなが奨学生のメールがなければ知ることがなかったかもしれません。

教育にかかわらず、開発企業に苦しむ先住民族に対して無策、あるいは、抑圧的だった行政が、ここにきてかなり改善された印象があります。好調なフィリピン経済も、COWHEDのハンディクラフトの国内需要拡大など支援終了への追い風となっています。

12月下旬、山口県の高校生グループJRC会長から月会費が届きました。会報79号で紹介のように、1999年以降、先輩から後輩へチボリの里子支援を引き継いでいる皆さんです。感謝とともに記帳を済ませた時、なぜかふと、唯一の高校生会員に対して、会報や里子報告だけでよいのか気になりました。気候変動の責任を、大人や政府に厳しく問うたスウェーデンの高校生グレッタさんの姿が記憶に新しいためかもしれません。

JOFFPAの招聘でSCMSI代表団が来日した2010年には、華陵高校生との交流もあったと聞きました。今現地代表の招聘予定はありませんが、PIHS代表でモロ民族のナプサさんからは、直接感謝や成果を伝えたいという意向を聞きました。山口は遠方ですが、招聘の折には高校生の皆さんにも、チボリを含む先住民族の現況に触れる機会を提供させていただけるかもしれません。

暮れには又、会員のお一人から、高齢という退会理由とともに、支援中断を詫言のお電話をいただきました。感謝の意とともに、支援終了が近い事業もあり、ご安心下さいという対応をさせていただきました。

自立支援事業にゴールは必要です。一方で、ミンダナオ先住民族対象の活動は、貴重な伝統文化、多民族社会の在り方、さらに、私たち先進国の資源多消費社会を見直す等を学ぶ機会と考えると終わりはありません。

私事ですが、活動のきっかけは、新聞記事を教材として、熱帯林や地下資源の世界最大の輸入国日本を教える中で見つけた「チボリの里親」募集です。支援とともに教材にもと考えました。現会員の中にも子どもさんの名前で支援されている方がいらっしゃいます。次世代に何か伝えたいとの思いからの参加ではと拝察しています。

活動を通じて「学びたい」次世代の皆さんに十分こたえることは難しいですが、「支援」のニーズは減っても、学びや交流の対象として、私たちの長いミンダナオ先住民族にかかわる活動がお役に立てばと思います。そして、その意味での活動には終わりがなくてよいかもしれません。本年もよろしくお祈りします。(山崎)